

豊公謡曲

吉野詣

時 所 吉野山  
春

シテ 藏王権現  
ツレ 天女  
子方 豊太閤  
ワキ 太閤臣下  
ワキツレ 同

「影あきらけき日の本や。く。国民豊なりけり。

詞

「抑是は当今に仕へ奉る臣下なり。さても大閣大相國。本朝を心のまゝに治め三韓を平げ。剰へ唐よりも懇款に入るゝにより。武勇功を終へ還御ならせ給ひ。山城の国伏見の里に大宮作りし給へり。又此春は吉野の花見として御参詣の御事なれば。只今供奉仕り候。

道行

「頃は早花の都の春の空。く。風ものどけき淀川

や。舟さし下す曙の。月を江口の跡を見て。大江の岸や住吉の。松の木の間の淡路島。堺の津をも打ち過ぎて。信田の森の梢より。猶白雲の立田山。越えて程なく名にし負ふ。吉野の山に着きにけり。く。

詞

「急ぎ候ふ程に吉野山に着きて候。処々の旧跡をも尋ねばやと存じ候。

二人一声

「春は又。花の都となりにけり。桜に匂ふ吉野山。

ツレ  
「嵐も白き白雲の。梢を包む高嶺かな。

シテサシ  
「雲漠々花漫々。たいしゆ花に喻へば花に語あり。

二人  
「君が為め開け始めし天地の。久しき世々の花の色。  
浅からざりける匂ひかな。

下歌  
「時つ風枝をならさぬ春の日に。

上歌  
「鶯の声ほころぶる朝もよひ。／＼。木々の梢の色々  
に。霞み渡れる川づらの。波にも山路近ければ。  
花のうつらぬ水もなし。／＼。

ワキ詞  
「如何に老人に尋ねべき事あり。

シテ詞  
「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。

ワキ詞  
「是は都の人にて御座候ふが。当山の花初めて御覽  
ぜられ候。此あたりの名所旧跡。又千もとの桜の  
いはれなど聞し召るべく候ふ間。近づきて言上致  
し候へ。

シテ詞  
「さん候都の雲の上人ならば。清見原の天皇の昔な  
どは知し召されぬ事あらじ。又千本の桜の事。古

人の歌にも。むかし誰かゝる桜の種を植ゑて。吉野の花の山となしけんと詠じ給ふなれば。今は誰かは白雲の。色香をいかで答ふべき。

ワキカール  
「あら面白の答やな。されども神代の昔より。伝へいひおく謂はなきか。

ツレカール  
「もとよりこゝは天皇を。隠すといへる宮所。

シテ 「同じ勝手の神社。

ツレ 「深き恵は吉野川。

シテ 「岩切り通し行く水の。

二人 「すめる心は神の代を。移す鏡と御覽じて。猶疑はせ給ふなよ。

ワキ 「げに理りを木綿四手の。かゝる奇特を今聞くも。  
シテ 「さも疎からぬ。

ワキ 「人心や。

地 「花の都の稀人の。く。衣の色も唐錦。折から花のかざしにて。かざり車の下簾。猶たゞならぬ景

色かな。く。

クリ地

「抑此山と申すは。徳漢土に通ひて道五台山に続ける。

シテサシ  
「權現こゝにましくて。猶もろこしに顯はせり。

シテ  
「然れば和歌の言葉にも。もろこしの吉野山といはれしは。事の喻へにいひながら。又故なきにあらず。

クセ  
「彼五台山はもとよりも。山のあはひにて。冰雪常

にみちく。夏も寒力甚し。されば人倫道絶えて。おのづからなる世の中に。隠家とこそ聞えけれ。

シテ  
「大和路や吉野の山の奥は猶。

地  
「岩のかけ道末細く。人の往来のあらざれば。松横たはり橋朽ちて。一鳥鳴かず山更に。幽かる処から。天降ります神心。賢き御代を仰がんの。誓の末の山高み。今を盛の花の陰。都の人の御車。

寄せくる道のすなほなる。御心ぞ有難き。御心の程ぞ有難き。

ロング地  
「彼老翁の姿をば。く。山のかせきと見し物を。

心の花を顕はして。よしある今の物語。其名如何なる人やらん。

シテ  
「今は何をかつゝみ井の。此瑞垣の内に住む。神とはいはじ千早振。宮つこと御覽ぜよ。

地  
「そもそもや山路の奥ながく。隠れて跡を垂れ給ふ。神

体こゝに現じつゝ。言葉をかはす不思議さよ。

シテ  
「げにや天下の政。ためし少なき御代なれば。神も守りを添ふべしと。

地  
「いひしもあらず山陰に。翁さびたる狩衣。日も夕暮の花曇の。雲にまぎれて登りけり。高嶺の雲に登りけり。

ワキ歌  
「不思議や花の木の間より。く。咲く花ながら中空に。花降り異香薰じつゝ。音楽聞え吹く風に。

仮寐の夢を覚ますなり。く。

天女

「あら面白や面白や。誰かいつし霜葉は。二月の花よりも紅なりとは。車をとゞめてそゞろに愛せば。色こそ花の木陰なれ。

地 「天つ乙女の天降り。く。五節の舞の羽袖を返せば。花の色香は満ち満ちたり。(舞)

地 「糸竹呂律の声々に。く。妙なる舞楽の内に又。不思議や花の木陰より。金色の光かゝやき渡るは。

蔵王権現の来現かや。

後ジテ

「人老いて花をかんざしにして人恥ぢず。花は恥づべし老人の。頭にのぼる事を。花盛九重の雲の上。大位の光駕に月卿雲客悉く。袂を連ねて花やかなり。

地 「此折節を窺ひ給ひ。く。蔵王権現も形を顯し。

運ぶ歩もみつきなれや。本より吉野は千本の桜。中に色よき一枝を。君に捧ぐる。まのあたりなる

奇特かな。

シテ

「珍しの遊楽や。く。価はあらじ春の夜の。花に清香月は霞める。曙の空かけて。乙女は雲路によぢのぼれば。蔵王権現は吉野の宮にとゞまり給ひ。都に還御の道を守り。都に還御の道を守りの。神徳こそはめでたけれ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『古今謡曲解題』丸岡桂著

『謡曲評釈 第九輯』大和田建樹著